

「あひとの女ひとの家」 朴婉緒

訳：吉良 佳奈江

この夏、作家会議が北朝鮮同胞支援の詩の朗読会をした。詩人たちが参加するものだと思っていたら、各界の大御所たちにもそれぞれ普段から愛唱している詩を朗読する席が設けられているから私も一編朗読してほしいと頼まれた。自分が大御所と呼ばれることに戸惑ったが、北朝鮮支援だからと断るほど図々しくはなれなかったようだ。やりますと答えた。しかし、断る名分がないことよりももっと重要なのは朗読したい詩があったからではなかったろうか。その頃私が夢中になっていたのは キム ヨンデグ 金龍澤の「あひとの女ひとの家」という詩だ。金龍澤は私の好きな詩人のひとりではあるが、一番好きな詩人とまでは言えない。同じく「あひとの女ひとの家」も彼の多くの詩のうちでは、抜きんてた秀作には入らないかもしれない。「あひとの女ひとの家」は次の通りだ。

秋になると銀杏の木、銀杏の葉が黄色く色づく家／日の沈むころ遠くからでも私の目に真っ先に飛び込んでくる家／思えば恋しく／眺めれば胸がいっぱいになる家／どこかに出かけ遅く帰る夜には／灯りが、温かい灯りが黒い山の中に生きている家／その灯りの下で刺繍をしながら座っているだろう／あひとの女ひとの黒髪と肩を思うだけで／指先まで暖くなる家

あんずの花の咲く家／春になるとあんずの花が白く咲き／花びらが白く塀の向こうまで舞い散る家／あんずの花の散ったあんずの木の下で／体を伸ばすあひとの女ひとの水がめの中に／花びらが落ちれば花びらが起こした波紋のように私もそこに／行きたい家

鮮やかな黄色の銀杏の葉が散ると／あひとの女ひと／父さんとあひとの女ひと／大きい兄さんが／屋根に上って／一日中黄色く屋根をいただく家／黄色い家

なぜかひらいた門の隙間からあひとの女ひとの家の中庭が見え／あひとの女ひとが中庭を行ったり来たりしながら／何があるのか言葉はよく聞き取れ

ない声と／服の裾がちらりちらりと見えると／その中庭に入り私も手伝いたい家

中庭に日差しの黄色い家／夕餉の煙が美しく立ち上る家／裏庭に柿が赤く熟れる家／すずめの群れがさえずる家／雪の降る家／朝、雪が白く軒下をかすめ／庭に落ち／あひとの女ひとが体をすくめながら／まだ雪の残る庭を過ぎ／裏庭にキムチを出しに行き「わあ、雪が本当にきれいに降ったものね」と言いながら／雪がたっぷり降ってくる空を見上げて／まつ毛にかかった雪を払いながら／キムチのかめを開くとき／白い雪がかめのなかに／降る家／かめにかがんだあひとの女ひとの腰に／白い雪が白く白く降る家／私が綿の花のような雪になって降りたい家／夜を通して、幾夜も通して雪が降り／誰も行き来する者のない夜遅く／あひとの女ひとの部屋からだけ暖かい灯りがもれだすと／足跡を隠してあひとの女ひとの中庭を過ぎあひとの女ひとの部屋の前／土間に立ってあひとの女ひとの、雪のかかった履物を見ながら／頭に、肩に積もった雪を払い／静かに、降る雪にも聞こえない声で／静かに静かにあひとの女ひとを呼びたい家／あひとの女ひと／の／家

いつだったか／いつだったか田植えの食事を頭に乗せて行き私とぼったり／出会ったときに／「あらまあ」と驚いてぱっと立ち止まり両目を真ん丸にして／私を見つめてうれしさいっぱい／明るく、屋外で、山盛りによそったごはんのように、／白おく白い歯を見せて笑っていたあひとの女ひと 牡丹のようなあひとの女ひと

あひとの女ひとが花のような十九歳まで住んでいた家／うちの村のすぐ上の村の路地に入って最初の家／私が外から家に戻る時／車を降りると一番先に目のいく家／あひとの女ひとの家の前を通り過ぎあひとの女ひとの姿が見えなかったら／自然と歩みが遅くなるあひとの女ひとの家／今は、ああ、今はこの世にないあひとの家／私の胸の中に建てられた家／目を閉じれば風が白く舞う家／雪が降り、ああ、雪が降り、あんずの木の細枝の間に／綿の花のような雪が三日も／降っていた家

／あの女の家／いつもどんな時も私のところが真っ先に／飛んで／いついた家／あの／女の／家／思えば、思えば、思、え、ば……

私が雑誌『緑色評論』でその詩を初めて読んでびっくりしたのは、それが私たちの故郷の村とコプタニとマンドゥギのことをうたっていると思ったからだ。チャン・マンドゥギ氏には七十歳をとうに過ぎた今でも文学青年の面影がある。ほんの何年か前までも、新人作家の登竜門である新春文芸の季節になると胸がわくわくすると言っていた。胸がわくわくするだけでなく、きっと実際に応募もしていたと思う。その感情がどれほど抑えがたいものなのか、私もよく知っている。もしも、その詩の作者が金龍澤という有名な詩人ではなく、初めて目にする名前だったら、私はそれがデビューしたチャン・マンドゥギ氏のペンネームだと思い込んでいただろう。私はその詩を何度も何度も読んだ。初めはぼんやりと霞んでいた映像が、まるで薬液につけた印画紙のようにだんだんはっきり浮かび上がった。初めのうちは見えなかった控えめな美しさまでもひとつひとつ現れて、私はとうとう懐かしさと悲しみに切ない気持ちをこらえられず、一人でのろのろと葡萄酒をひと瓶空けた。

コプタニは立派な息子が四人もいる家の末っ子で一人娘だった。真面目な農夫の父親と働き者の息子たちは、秋になると私たちの村で一番先に屋根のわらをふいた。男手が五人分もあるので、あっという間に仕上げられたが、誰より先にコプタニの家の屋根に上って張り切るのはマンドゥギだった。マンドゥギは私たちの村から一人だけ町の中学校に通っていて、村の共同作業からは自然と免除されていたのに、コプタニの家も人手が足りないわけではなかったのに、誰より先に駆け付けたものだ。コプタニの下の子とマンドゥギは友達同士だった。しかし村の人たちは、マンドゥギがコプタニの家の仕事を張り切るのは友人の家だからではなく、その女、コプタニの家だからだとわかっていた。台所では暖かい昼食の支度をしていて、煙が美しく立ち上る暖かい秋の日、コプタニの家の屋根に真っ先に上って旗のように誇らしそうに立っているマンドゥギを見ては、村の老人たちは自分の嫁がかわいければ実家の棒っ

杭にもお辞儀をするって言うからな、とからかったが、それもマンドゥギがきっとコプタニの花婿になるだろうと、村中が公然と認めている証拠だった。

二人の仲は年下の私たちの間でも羨望の的だった。私たちは二人が愛し合っていると言いながら不思議と胸をときめかせたものだ。一九四〇年代の保守的な田舎の村でも、若い男女が親の知らないところで付き合うことが全くなかったわけではない。誰が誰に惚れたとか、目を合わせたとか、しまいには体を重ねたという噂まで起こることがあった。それは親が顔をあげて歩けなくなるほどのスキャンダルで、その結果もほとんどはみじめで後味の悪い終わり方だった。

コプタニとマンドゥギが両思いなのを、惚れた腫れたなどとは言わずに愛し合っていると言ったのも、そんなスキャンダルとは区別したい気持ちからだったろう。村の人たちにとっては彼らは憧れであり、そうやって区別してやるのが愛情だった。男たちは寺子屋にあたる書堂で漢文を学び、女たちはその肩越しにハングルを読める程度に学んで文字が全く読めないわけではなかったが、町から二里あまり離れたこの村では、新式学校の教育はまだ遠い噂だった。しかし機会さえあれば息子だけでも行かせてやりたいと思っていた。恋愛に対しても同じような考えを持っていて、都会で学んだ人たちが言う開化風俗に対して、抗えない好奇心を持っていた。若い人たちの間でだけでなく、何かにつけて難癖をつけたがる老人たちからも、二人の恋愛は早くから認められたも同然だった。というのも二人がまだ恋心を抱く前から、二人が付き合ったらどんなに似合いのカップルになるだろうかと想像しては、目を細めて喜んでしたのは老人たちだったのだから。マンドゥギの家もコプタニの家も、一年食べて暮らすのに多すぎも少なすぎもしない土地を持った自作農家で、家族はみな貧しい人を慮ることのできる温和な人たちだった。マンドゥギの上には姉ばかり、コプタニには兄ばかりいて、待望の大切な息子、娘だった。自分の家で大事に思われている子どもは、他の人たちも惜しみなく目をかけてやり、声をかけてやるものだ。二人がまさにそうだった。

コプタニは田舎の子どもには珍しく肌が白く、

澄んだ瞳にまつ毛が長かった。私には彼女のまつ毛がどれだけ長いかわからない言葉がなかったが、金龍澤の詩の中でようやく一番ぴったりの言葉を見つけた。牡丹雪がそこに舞い降りて一休みするほど長かった。牡丹雪が解けて露となり、しっとりと濡れたまつ毛が彼女の黒い瞳に影を落とせば、どんなに薄情な人間の心も溶けるだろうと思うほど大人びた切ない表情をすることもあった。マンドゥギは聡明で一を教えれば十を知り、見た目もまた凛々しかった。二人とも片田舎には珍しいほどだった。マンドゥギが川から生まれた龍なら、コプタニは泥水に咲いた蓮の花だった。誰からということなく、二人がいずれ花婿花嫁になったらまったくお似合いだな、という声がもれた。二人は天の定めたカップルだと異口同音に言いあったものだ。両家の暮らし向きもまた互いに傾きもせず、榮えすぎもせず、大人たちは素朴で正直で、周りから婿候補、嫁候補と目された子どもに、幼いころから目をかけて、美しく、凛々しく育つのを健気に思っただけだった。私たちの村にとってコプタニとマンドゥギは花であり、夢だった。しかし一度か二度でも仲人になったことある人ならわかるだろう。周りから見れば天の定めた許嫁のようにぴったりの二人がいて、彼らを取り結ぶのを天のおぼしめしのように感じて仲人になるのに、本人たちは意外と冷淡なのだ。男と女が互いに慕いあうのは、神のいたずらのように人間の計画の及ばないことだ。うまくいくようにと他人がでしゃばると、逆に定めに逆らおうとする性質まであるようだ。

しかし、マンドゥギとコプタニは村の人たちの夢を裏切ることはなかった。その証拠にコプタニはマンドゥギを見るだけでひとときわ恥ずかしがるようになった。コプタニがマンドゥギのせいで小癪^{ペンダリ}を割った事件は、いつまでも村の人たちの話題になった。上と下の集落を合わせても二十戸あまりの小さな村で、井戸は一つしかなかった。水をくむのはもっぱら女性たちの役割で、水がめを頭に載せて手で支えることなく手をぶらぶらと遊ばせて、頭もあちこち見まわして見るべきものはちゃんと見て歩けようになると、ようやく貫録の出た一人前の主婦と言えたものだ。娘たちは母親のそんな技に憧れのまなざしを送りながらも、い

つかは自分たちもそんな最高のレベルに達なくてはというプレッシャーがあったのだろう。娘たちは幼い時から水がめを頭に載せたがった。子どもたちでもちゃんと頭に載せられる小さな水がめをパングリという。パングリは実用というよりも女の子たちの遊び道具に近く、落とせばすぐに割れた。娘たちをからかって呼ぶとき、ちびっこい娘という代わりにパングリほどの娘で通るのがうちの村だった。

コプタニは大事な娘で、兄嫁が二人もいたから水がめなど頭に載せなくてもよかったが、それでも自分用のパングリを持っていて、仲間たちがやることは自分も全部やってみたがる年頃だった。しかし頭に載せたパングリの取っ手を両手でつかまなくては一步も歩けない初心者だった。そうやってパングリで水を汲んでいくときに、遠くからマンドゥギが来るのが見えた。マンドゥギはパングリを持ってやろうとあわてて駆け寄ったのだが、それを見たコプタニはあらまあ、と、スカートの上の方を持ち上げようとしてパングリの取っ手を放してしまったのだ。パングリが割れたのは言うまでもない。コプタニが十四・五歳、胸があんずの種ほどに膨らみ始めるころだった。上衣^{チョゴリ}を短く着て、チマの上の方で胸を巻いていたので、頭で物を運ぶときには脇の下と胸がむき出しになった。その頃私たちの地方の風習では、若い女性が胸を見られても平気だった。頭に荷物を載せていく母親の背中におんぶされた子どもが、脇の下から母親のおっぱいをいじったり、引っ張って乳を吸う姿もよく見られた。胸に対する羞恥心も一種の文化現象ではないか。その頃母親の胸は子どものごはん茶碗くらいに思われていて、一方へそを見られるのが恥ずかしいことだった。娘たちは少し違っただろうが、そんな風土でパングリを割ってまで胸を隠したかったのは並大抵のことではなかった。

うちの村から一番早くマンドゥギが町の中学校に進学すると、コプタニは父親にねだって一里先に新しくできた小学校の分校に入学した。パングリ事件の後のことだ。分校は簡易学校とも呼ばれ、入学に年齢制限などもなかった。男子学生の中には子どものいる人もいるほどだった。中学校も同じようなものだったろう。マンドゥギは小学校を

出てから何年か家で農業を手伝っていたが、ソウルに嫁いだ上の姉が新式教育の必要性を熱弁して上級学校に行くことになったから、人より遅く進学することになったわけだ。

簡易学校はうちの村から町に行く途中のキンネ谷^{ゴル}にあった。その村は五十戸を超え、近隣で一番大きかった。峠を二度越え、川も一度渡らなければならなかった。もちろんマンドゥギとコプタニは自然と一緒に登下校をするようになった。周りの人たちもそれを当然だと思っていた。いつもコプタニがずっと遅れて歩き、マンドゥギがひとりでどんどん先に進んでは待ってやっていた。夫婦が一緒に外出するときでも並んで歩くことはなく、妻がずっと後ろをついて行くのが礼節だと考えられていた時代だった。コプタニより二倍も遠くまで行かねばならないマンドゥギが、コプタニの歩みがじれったくて待ちきれず、さっさと先に行ってしまうこともあった。

野原を濡らす小川がいたるところに網の目のように広がる水の多い地方だったが、橋を渡らなければならぬキンネ谷の川の流れはとりわけ美しかった。水は深くはなかったが谷が深く、道から水面までの急斜面の堤には小さな野の花が春夏秋冬と休む間もなく咲いては散って、白い小石と河砂と花影の間を群れを成して泳いでいく魚たちと、いたずらするようにはじけるさざ波は水晶のように透き通っていた。その川には土橋が架けられていた。両側の堤から二本の柱を渡しかけ、その間を縄や葛のつるなどで編んで粘土でしっかりと塗り固めた土橋は、まるで小道の続きのように穏やかだった。しかし大雨が降ったり、春の雪解けのころには土橋のところどころに穴も空いて、滑りやすくなることもあった。そんな不便な状態も長くは続かず、すぐに誰かの手によってあっという間に補修されたが、問題は梅雨の期間や補修する直前だった。特に娘たちは穴の開いた土橋を渡るのを怖がった。いっそ堤を降りて靴を脱ぎ、ちゃぷちゃぷと川の水に入っていく方が安心だった。水かさが増えると言っても腰のあたりまでだったが、そんな時には男子生徒たちが先頭にたって棒で水の深さを探っては娘たちを案内して、男らしさを見せた。しかしマンドゥギは、コプタニがチマをへその上までまくり上げて下着を濡らし

ながら他の男たちと川を渡るのが我慢ならなかった。登校するときはもちろん、下校の時もなんとか時間を合わせては、穴の開いた土橋と一緒に渡ってやった。渡る途中でコプタニが大げさに怖がると、マンドゥギはそれをいちいち聞いてやり、なだめてやって、長くもない土橋の上で二人が何度も互いに抱き合っているという噂がばっと広がったこともあった。しかし旧式の老人たちもそんな噂をみっともない真似だと叱ることなく、温かく見守っていた。二人はどうせ結婚するだろうし、二人が両思いなのは、美しい一つがいの鳥がくちばしをこすり合わせているように微笑ましかった。土橋ではなく恋愛橋だというものもいたが、悪意などはなかった。

中学校の上級に進級する頃、マンドゥギは文学に目覚めた。しばらくの間『懊悩の舞踏』という詩集をかばんに入れずに、脇に抱えて通っていたのだが、それが何とも格好よく見えたものだ。書堂が村の男たちには義務教育機関代わりだったので、学校の門前まで行ったことがない男たちも、漢字だったらみんなが読めた。「おうのうのぶとう」と字面を追って読むことはできても、それがどんな意味なのか、ぴんと来る者はいなかった。文字こそ漢字だったが、その単語の一つひとつは、異国的でハイカラなイメージを呼び起こした。どこから流れてきた言葉なのか、そのころハイカラという言葉がうちの村の若者の間で流行していた。どこかしら異国的で、うわべはよいが若干中身のなさそうに見えるものは何でもハイカラだと言っていた。

村の若者たちのあいだに春園旋風をまき起こしたのもマンドゥギだった。『土』『瑞宗哀史』『無情』など春園・李光洙^{イグァンソ}の本は若者たちの間でボロボロになるまで回し読みされていた。本はボロボロになったが、それを一度でも味わった青年たちのまなざしは星のように輝いた。しかし間もなく春園が人に先駆けて創氏改名し、青年たちを戦地に送り出す熱弁をふるったという話を広めて、青年たちを失意に陥れ、混乱させたのもマンドゥギだった。彼が村の青年たちの精神の手綱を引っ張ったり緩めたりしていたといっても過言ではなかった。第二次世界大戦が末期に入り、村の暮らし向きも日ごとに陰しくなっていくが若者たちの精神の

飢渴はさらに深刻だったので、それだけ影響を受けやすかった。マンドゥギが広めた本のおかげで互いに心が通じるようになった若者たちが集まって、文学の話をしたり、世の中の動きについて鬱憤も吐き出したりする集まりが自然と発生したが、そこでも中心人物はマンドゥギだった。しかし、たかだか人より遅く進学した中学生だ。植民地青年の意識ある集まりというよりも、マンドゥギの知的虚栄心を満たす場だった。彼はたまに自分が書いたという詩を悲壮な語調で読んでくれることがあったが、そのなかでコプタニが目を潤ませるほど気に入った詩があった。後からわかってみれば ^{イムフア} 林和 の詩の後半だった。

今日も煙は／雲よりも高く、／誰か 青年が
何人か、／あまりに狭い空を／広い希望の瞳の
奥深く／湖のようにたたえているだろう。／広
げた腕がどんなにせまくとも、／おお！空より
広い我が海。

こんな詩だったが、腕を広げておお、空より広い我が海、という部分は激情に喉を詰まらせて読み上げるので、コプタニはそれを聞くたびにマンドゥギをもっと広い世界に送り出してあげなければならないようで、胸が震えると言っていた。

コプタニは時おりマンドゥギから送られた手紙を私に見せてくれることがあった。頼まれてもいないのに見せるのが気まずいからか、一人で見るのがもったいなくて……と、とってつけたように言ったものだ。ラブレターをひとりで見るのがもったいもないというのも、実際はおかしな話だ。それは人に見せても問題ない淡白な手紙だという意味にもなるだろうが、コプタニからすれば文学的な表現を自慢したかったのだろう。その中でも今でも覚えているのはコプタニの家の垣根の下のおおずきを‘ちびっこ番人が提灯を赤く灯して立っているようだ’と表現したことだった。当時うちの村ではほとんどの家で、れんぎょうで裏庭の垣根を作っていた。そしてどの家も垣根のもとにはおおずきが自生していた。全く目につかない雑草で、春から夏にかけては、そこにはおおずきがあることも気づかなかった。おおずきがそこにあるのに気付くのは、草むらが黄色く生気をなくした後だっ

た。熟したほおずきは紅葉よりも美しく、まさに提灯のように小さくかわいらしかった。しかしその頃になると赤く染まった柿の葉も、さらに美しい柿の実にその座を譲り、畑では唐辛子が真っ赤に色づいた。ほおずきなど、娘たちがひまつぶしに頬張って遊ぶだけで、その他には誰にも使い道のない、つまらないただの雑草だった。我が家の垣根のもとにもほおずきはびっしり生えていた。それほどありふれたほおずきのなかで、コプタニの家のほおずきだけが、提灯の灯りを掲げたちびっこ番人になったのだ。マンドゥギはもしかして、恋しさが募ってコプタニの家の垣根のものと犬ぐりを抜け、赤く提灯を掲げたちびっこ番人を目にして、はっと我に返ったのではないだろうか。そうでなければ、あのありふれたほおずきの中でコプタニの家のほおずきだけを、あれほど特別なほおずきにするなんてできないことだった。

うちの村ではほおずきだけでなく、あんずの木もどこにでもあった。あんずの木のない家はなかった。当然のように村の名前も ^{ヘンチヨレンニ} 杏村里 だったのではないか。春になると、あんずはれんぎょうとともに村中を花園のように美しく飾ったが、その実は酸っぱくて渋くて食べられない種類だった。葉に使おうと種を少しばかりとっておく家もあるにはあったが、実は子どもたちもあまり食べないので落ちた場所で腐っていった。美しい村だった。あんずの花が見事に咲くころになると、れんげとすみれが野原と丘を覆った。れんげはどこまでも咲き広がり、すみれはこんもりと群れながらぼつりぼつりと咲いた。あんずが土に溶けて肥料になるころには、寂れた道に野いばらがに白く乱れ散り、月夜のように息を飲むほど物静かな道に変えた。

「あの ^{ひと} 女 の家」を読みながら振り返ってみれば、杏村里のあのどこにでもあるあんずの木の中でも、コプタニのうちのあんずの木は特別だったと思う。皆同じわら葺の家の中でもマンドゥギにはコプタニの家の屋根がとりわけ鮮やかな黄色だったように、あれだけありふれたほおずきの中でコプタニの家のほおずきだけが特別だったように。コプタニの家は杏村里の上の集落の入り口にあった。裏山から流れてきた小川がコプタニの家を回って下の集落に流れ込み、マンドゥギの家の門前

の田畑を通るようになっていた。コプタニの家のあんずの木は、がっしりと大きくて父親が娘とその友達のために頑丈なブランコをぶら下げてやるほどだった。マンドゥギはおそらく小川が白く、白く運んでくるあんずの花をラブレターのように胸をときめかせて眺めただろう。

一九四五年にも杏村里にあんずの花が咲き、ほおずきの花、すみれの花、れんげの花が咲いたのだろうか。そんなはずもないが、なんだか咲かなかったように思えてならない。あの花々が咲く前にマンドゥギとコプタニの恋愛も終わってしまったのだろうか。人より遅れて進学したマンドゥギは、町の四年制中学校を卒業するや徴兵で引っ張られてしまった。何日間かの猶予があり、両家ではその間に婚礼をあげようとした。当時は恋愛などしたことのない若者も、子孫だけでも残そうとあわてて相手を探してきて婚礼をするのも珍しくなかった。その上マンドゥギは一人息子で、相性占いをして慌てて相手を探さなくても村中が両思いだと知っている花嫁候補がいた。しかし彼は婚礼を挙げることをかたくなに拒んだ。それが彼の愛し方だったのだろう。他の人が誰もわかってくれなくても、コプタニだけには自分の愛し方をわかってもらおうと、雪の残る早春の朧月夜に鶏が時を告げるまでコプタニを連れて歩き回ったという。コプタニが彼の提案に心から納得したかどうかは知りようがない。しかし二人が夜通し歩き回ったのではなく、どこか水車小屋のようなところで夜を明かしたと言ってもマンドゥギの手がコプタニの胸元に伸びることもなかっただろうと、コプタニの両親も、村の人たちも信じていた。そんな時代だった。純潔な時代だったのか、バカみたいな時代だったのかわからないが、そのころ私たちが大切にしていた礼節とはそういうものだった。

マンドゥギの家の門に日本の旗と出征軍人の家を示す旗が、葬式ののぼりのようにうら悲しくはためいた。その家の客間^{サラン}ではもう何日も酒宴が続けられていたが、密造酒の取り締まりに引っかかることもなく……そしてわずか十日ほどが瞬く間に過ぎて、マンドゥギは入營することになった。必ず帰ってくるから待っていてくれとマンドゥギがコプタニを説得するのは難しくなかったはずだ。コプタニはどこかに嫁に行く娘でもなかったし、

コプタニの家族もやはりどこかに嫁にやる人たちでもなかったから。説得にあれほど長い時間がかかったのは、それならどうして婚礼を済ませて行っただめなのかというコプタニのしごくまっとうな疑問のためだったと思う。コプタニは名前の通り¹心根も絹地のように細やかで美しかったが、自分が正しいと思ったことを曲げるような軟弱者ではなかったから。縁起が悪くて誰も口にしなかったが、村の人たちはマンドゥギが死地に赴くとわかっていて、コプタニを寡婦にしないようにという彼の深い思いやりに、心の中でたいそう感心していた。

マンドゥギとコプタニは今の言葉で言えば村のマスコットとでも言えようか。二人ともが幸せでなくては災難でも起こりそうで、守ってやりたかったし、マンドゥギの行動はそんな素朴な人々の心も逆なでしない最善のものだった。

マンドゥギが死んだ後も、村の青年たちは遅かれ早かれ徴兵や徴用に引っ張られ、村に残った男と言えど中年か年寄りだけだった。コプタニの兄たちも都市に出て工場に就職した三番目の兄と、父母と同居している長兄を除いた二人の兄が徴用で出て行き、息子自慢の家の息子たちも減っていった。若者だけを連れていくのではなく、食糧の供出も厳しさを極め、豊かだった村も食料が底をつく端境期を越えられるか心配した。雨の日にチヂミを作る時には互いに分け合おうと大皿一枚分は焼いていた人々の心にも、ひびが入り始めた。恐ろしい話が伝染病よりもまがまがしく、抑えがたく村中を巻き込んだ。それ以前にも女子挺身隊について全く知らなかったわけではない。日本本土や南洋群島に行って働きたい娘たちは志願さえすれば連れて行ってくれて、後から家に送金もさせてくれるという村役場の公文が村を一回りした後だったが、その話を真に受ける家はひとつもなく、まさか金儲けをするために強制的に人を送るとは誰も予想しなかった。しかし聞こえてくる噂はそうではなく、何人かずつのノルマを課された村役場の労務担当の役人が巡査たちと一緒に、年ごろの娘のいる家を脅すこともあり、有無を言わず引っ張って行くことさえあるという。まさか、まさかと思っている間にもっと悪いことが起きた。

¹ 굵다 コプタには細やかで美しいという意味がある。

それは同じ村の中で起きたことなので、噂ではなく実際の状況だった。隠した穀物を探しだそうと村の外からやってきた役人と巡査を見て、挺身隊に選びに来たものだと早合点した両親が、娘を納戸のわらの山の中に隠したそう。供出督励班たちは鋭い槍のついた長竿で穀物を隠していそうなところを手当たり次第刺してみるのがいつものやり方だった。納戸のわらの山に槍を突き刺すのと、両親がやめろと悲鳴を上げるのがほとんど同時だった。槍の先に娘の肉片がついてきたとも言い、槍に刺さったはらわたがついてきたとも言い、娘はその場で死んだとも言い、血をたくさん流しながら荷車で町の病院まで運ばれたが死んだのか、生きているのかわからないとも言った。とにかくこの噂の波紋は、村中の娘を持つ家を昼夜を問わず悪夢に苦しめることになった。残酷な出来事だった。

都会で軍需工場に勤めていたコプタニの兄さんが、ふくらはぎにゲートルを巻き、拍車の付いた靴を履いた中年男を連れて田舎に戻ってきた。一度結婚歴のある男で、新義州にある重要な工事現場で測量技師をしているそう。両親からあのまがまがしい噂を聞いて、あわてて探してきたコプタニの新郎候補だった。最初に結婚した夫人が十年近く子どもを産めないで追い出して、再婚するという彼は、コプタニのあのきれいな顔よりも特に大きくもないお尻ばかりをじろじろと見ては、そうだなあ、子どもをちゃんと産めるかね？と繰り返し首をかしげ、それほど気に入ってないようだったという。しかしとにかく未婚の若者の全然いない時代だった。しかもその年のいった新郎候補が今やっている仕事は軍事的に重要な仕事だから、徴用からは自然と除外されるのだという。コプタニの家族はあんなに美しい娘を雷で豆を煎るように大慌てで後妻の座に送り出してしまった。

コプタニがどんな心持ちで結婚に応じたのかは知りようがない。血を見ればまともな人も正気を失うというのではない。血に染まった噂も同じだった。コプタニの家族だけでなく村の人たちも理性を失ってしまった。マンドゥギとコプタニの恋愛を微笑ましく見守ってきた村の大人たちも、今となってはコプタニのためにしてあげられるのは、日本軍に差し出さないことだけだった。そればかり

りかコプタニの母親は血が恐ろしくて鶏一羽しめられない、とても優しい人だった。あの血に染まった噂に身が震え、正体なくうろたえたことだろう。コプタニはマンドゥギとの堅い約束を破って遠くに嫁ぐくらいなら、むしろ死んでしまいたかったはずだ。それでも彼女も自ら命を絶つほど我を通すことはできなかった。せいぜい死んだように放心状態になるだけだった。自分の家で祝言をあげて四日目に、新郎について家を出たコプタニは死に化粧をしたようにひんやりした顔で、表情などはなかった。

遠い遠い新義州に嫁いでいて、最初の里帰りもする前に日本が敗れ、解放となった。彼女は十九で出て行った屋根の黄色い家に再び戻ってこられなかった。私たちの故郷はギリギリのところで三十八度線の南になり、北朝鮮の新義州とは道が絶たれてしまった²。マンドゥギは生きて帰ってきた。その翌年の春に、マンドゥギは同じ杏村里の娘のスネと結婚式を挙げた。スネはふっくらと福のありそうな娘だったが、コプタニとは比べ物にならなかった。婚礼の日、風習どおりに新郎を逆さにつるして叩いていじめるのだが、軍隊や徴用に行き、荒くれて帰ってきた青年たちが、新郎の足の裏をどれほどひどく叩いたものか、マンドゥギがおいおい声をあげて泣いたそう。マンドゥギもまた軍隊へ行ってありったけの苦難をなめてきたのだから、いたずら半分に叩かれてこられずに泣いたはずがない。泣きたくて、思いっきり泣きたくて泣いたのだろう。今でもまだ二人の微笑ましい恋を忘れられない村の人たちは、こんなふうにマンドゥギの一手一投足をコプタニと関連付けて考えるものだから、嫁いだスネの心も休まらなかっただろう。しかし村人たちが相性を確かめる間もなく、すぐに二人はソウルに行ってしまった。マンドゥギは一人息子だったが、ソウルの姉が働き口を見つけて連れて行った。

朝鮮戦争の後、三十八度線の代わりに引かれた休戦ラインは、杏村里を北側の土地にしてしまった。それまでは直接会うことはなくても、故郷に帰った折にマンドゥギとスネの暮らし向きがいいという程度は聞くこともできたが、それも聞けな

² 朴婉緒の故郷の開城は、解放時には韓国側に属したが、朝鮮戦争後は、北朝鮮領となった。

くなった。朝鮮戦争の時死んでいなかったら同じソウルの空の下、どの辺に暮らしているのだろうか、しばらくの間はふと思い出したりもしたが、マンドゥギは私の記憶の中からすっかり消えてしまった。ソウル暮らしというものは、何親等とわかっている親戚でも結婚の招待状や訃報を受け取ってようやくしたくをする程度で、利害関係が及ばない人間関係はさっぱりと忘れていくものだ。

マンドゥギとソウルで再会してから、まだ十年とは経っていない。今は亡くなってしまったが、その時までは健在だった私のおじが、うちの故郷の郡民会に行ってみたいと言い出して、一緒に行った席だった。失郷民たちが慰めあう場がほしいそうであるように、年寄りだらけだった。毎年開かれるというが、おじのように初めて参加した人同士は会って相手を思い出すのにしばらく時間がかかった。主催者側の配慮で相手がわかりやすいようにと村の単位で席に着き、私たちだけでさらに里の単位でグループを作った。杏村里は私とおじと見知らぬ老夫婦の四人しかいなかった。その翌年に亡くなったおじはその時に八十歳近い年だったので、故郷の土の匂いの代わりに、故郷の人の体臭でもかぎたい気持ちで、いきなり郡民会に行こうと言い出したようだ。死ぬ日が近づくとそれまでにしたことのないことをしたくなるのを、子どもたちは軽い老人性痴呆のように扱って、結局、姪の私がお供について行ったのだ。杏村里の老紳士も、おじが誰だかわからない様子だった。ただ伯父が年上なので杏村里に住んでいた何某です、と丁寧にあいさつをされたが、私は別に耳を傾けておらず聞き取れなかった。後で彼が私に名刺を差し出し挨拶を請わなかったら、おそらく最後まで気付かなかっただろう。なんとか電業社代表、チャン・マンドゥギとなっている名刺に何か引っかかって、もう一度よく見ると、若い日の彼がどこかからひょっこりと顔を出すようにはっきりと浮かび上がった。体つきもそれほど太っておらず、顔も老けずに若々しかった。私と彼はそれほど親しい間ではなかった。彼はコプタニのものだったから、当時の私たちはみんな彼のことを、牛が鶏を見るように接するのが礼儀だと思っていた。それはチャン・マンドゥギ氏も同じだっただろう。彼は村ではとにかく有名だったが、有名な

がファンを見分けてくれるわけではない。私は彼に全然変わってないと言ってから、照れて笑った。しばらく誰だかわからずにいたくせに、変わっていないなんてまったくおかしい台詞だったからだ。

スネを思い出すのはさらに不可能だった。この裕福で仲のよさそうな老夫婦の片方がスネなのかどうかも自信がなかった。むしろスネの方で私に気付いて、全然変わっていないと言ってくれたのでスネなんだな、と考えた。私は自分が学校に行っているからと言って、学校も行かず家で縫物なんぞを習っている自分より年上の子どもたちと一緒に遊んだことがなかった。マンドゥギとスネは見るからに似合いの夫婦だった。そのまま別れるのは名残惜しくて、互いに電話番号を交換したのだが、意外にもスネがよく電話してきて昼食も一緒に食べ、買い物にも一緒に行く仲が続いた。彼女はチャン・マンドゥギ氏がまだコプタニを忘れられずにいるのだと訴えた。

ねえ、貴方^{あなた}。みんな私に向かって運がいいって言うけどそんな見た目だけ、渋くて食べられたものじゃないあのあんずと同じよ。貴方だから話すの。他の人たちにはどんなに話してみても私の方がおかしい人って言われるのよ。誰が私の気持ちをわかってくれるの。お金もちゃんと稼いで、一生、浮気もしないで、子どもたちにもよくして、私にだって、悪いことなんてしていなくても責めれば謝ってくれるような、そんな旦那さんが、どこにいるのかってみんな言いますけどね、きっと私みたいに、たちの悪い妾を相手にして生きてる女はいないわよ。コプタニときたら、うちの旦那さんにぴったりくっついていてはお見通しなのに、髪をひつつかむことも恥をかかせることもできないでしょう。こっちの気が狂いそうなの。それでも私、貴方に会えてよかったわ。そうでなかったらこの悔しい気持ちを誰に話すことができるのよ。あの爺さんときたら、今もそうね、彼女にラブレターを書いているんですよ。まさかって？私も最初はまさかって思いましたよ。自分でも恥ずかしいのか、そりゃあ詩を書いているって言いますよ。私がこっそり盗み見たら、なに、‘君の肩にあんずの花が降るね’だとか‘あんずの花は毎年咲くのに、私の恋しい人はどうして行ったきり帰ってこないのか’だとかこんな調子で、ラブレ

ターでしょう、詩だって言うの。それだけだと思
う？私たち去年中国旅行に行ったんだけど、その
時もどんなにはらわたが煮えくり返ったか。思惑
を知らずについて行った私もおめでたい女だった
のよ。白頭山を見てから、丹東かどこかで鴨緑江
の遊覧船に乗ったんです。船に乗って北朝鮮の領
土の近くまで行くんですけどね、本当に川辺に遊
びに来ている子どもたちまで見えるほど船が北朝
鮮の近くに行くもんだから、私もなんだかおかし
な気持ちになりましたよ。ただの舟遊びだと気楽
に楽しんでいるのはみんな中国人で、深刻そうに
硬い表情になるのはみんな韓国の人だったわねえ。
そのくらいは当然でしょ。でもうちの爺さんとき
たら、急に船べりに頭を下げて声をあげて泣くじ
ゃないの。髪の毛の白い年寄りが全身をふるわせ
てすよ。分断の悲しみだろうって？あらまあ、そう
じゃなくてそこに見えた土地が新義州だったの。
コプタニの奴が住んでいるところに届きそうで届
きそうで、届かないから気が狂いそうだったんで
しょうよ、ふん。その場で川に突き落としたくな
ったものですよ。泳いであの女のところに行けっ
て言うのよ。それだけだと思ふ？こちらでお金も
十分に稼いで事業もうまくいっているのに、いき
なり子どもはここで育てたくないからアメリカに
移民しようって言い出したこともあったんですか
らね。自分も私も英語の一言も話せないくせに、
移民しようなんて何を考えていたと思う？わかり
きってるわ。アメリカの市民権があれば北朝鮮に
思い通りに行くことができるそうじゃない。私が
そんなたくらみに引っかかるように見えますか？
行くななら一人で行けて、行って彼女を連れて仲
良く暮らしてみろって言ったら、私に気でも違っ
たのかって言いながら落ち込んでましたよ。子ど
もたちにはね、これ以上ない、いい父親なんです
よ。それだけを頼りに今まで辛い世の中を耐えて
きたんですよ。

まとめるとだいたいこんな話だった。他でもな
く、こんな話はコプタニとマンドゥギの恋愛を知
っている人でなければ到底受け入れられる話では
ないだろう。しかしその女性のレパトリーはこの
何種類かに限られていた。今でもマンドゥギが
コプタニだけを思っているという証拠はそれ以上
は出せず、私も同じような話をあまりに繰り返し

聞いたものだからうんざりして、その女性よりも
チャン・マンドゥギ氏の方がかわいそうになって
きたころ、彼女の訃報を聞いた。チャン・マンド
ゥギ氏は妻に先立たれたのだ。高血圧でここ何年
か薬を服用していたが、突然倒れてから意識が戻
ることなく四日目に息を引き取ったという。弔問
に行き彼女の遺影を見て、ぎくりとした。二十代
後半にしか見えない写真だった。最近の遺影もあ
まり年を取った写真は見たくないといって、あま
り年を取る前に写真を撮っておくとは言うが、七
十代の夫が涙を落としている前に二十代の写真は
やりすぎだと思った。子どもたちも弔問客たちの
そんな目つきに気付いて、母には普段から自分が
死んだら年を取った写真は使わないでくれと頼ま
れていて、亡くなってから見てみると自分で準備
した遺影があったのだという。私はついその女性
の若い時とコプタニの若い時を頭の中で比べた。
相手にならなかった。私の想像の中のコプタニは
ますます若く美しくなり、その女性は若いだけが
とりえで、他にはどこにでもいる顔だった。そし
てそのとき初めて、私は彼女がかわいそうになっ
た。ああ、この人は死ぬまでどれほど大変な恋敵
と一緒に生きてきたのだろうか。死ぬまで老ける
ことも、ひび割れることもない恋敵なんてどれほ
ど耐え難い敵だったろうか。

その女性が死んでからマンドゥギと会う用事があるはずもなかった。

彼に偶然に会ったのは、彼の妻が亡くなってから二・三年後、驚いたことに挺身隊のハルモニたちを支援するための集会でのことだった。意外だったが、生前の妻から耳にタコができるほど注入された先入観があるからか、彼がその集まりに現れたこともどうしてもコプタニと関連付けて考えてしまう。集会が終わってから彼の姿が見えなくなると、私はまるで犯人を追いかけるようにあわてて会場を飛び出し、ずっと先を肩をがっくりと落として歩いていく彼を呼びとめた。そして問いただすように、後妻はもらったのかと聞いた。彼は否定して、これからはそんなつもりはないと、聞いていないことまで付け加えて答えたのだった。

どうしてですか？コプタニを忘れられないからですか？ここにはどうして来たんですか？挺身隊にそんなに恨みがあるんですか？たかが女性一人

のために。挺身隊がなかったら自分たちは結婚できたのに、って思ってた？まあ、ご立派ですこと。

私が浴びせた言葉に彼は答える代りに、先に立って近所の喫茶店へ向かった。その年でまださわやかさが残っている老人を、私はまるでスネの魂が乗り移ったようにひねた気持ちで見つめた。彼が低い声で話した。

僕がコプタニを忘れられないって言うのは、まったくうちのやつの思い込みですよ。僕はもうコプタニの顔も思い出せません。うちのがしつこく蒸し返さなかったら、きっと名前も忘れてしまっていたでしょう。僕がコプタニを恋しがっていたとしたら、それはきっと誰にでもあり得る若い日に対する淡い郷愁でしょう。美しいわが故郷で過ごした若い日がふと懐かしくなるのが罪になりますか。僕が遊覧船で泣いたのも、あれが本当に北朝鮮の土地だろうか、他人の国から眺めるとこんなにすぐ近くなのに、自分の国からはどうしてあんなに遠いのだろうか。それがさびしくて、恥ずかしくて我知らず涙があふれてきたんですよ、あそこが新義州だというのは別に大事ではありませんでした。今日ここに来ることになったのも、そうですね、自分がしたことに自分で説明がつかないんですが……たぶん、この間偶然に日本の雑誌で、挺身隊なんかたいした問題ではないと主張する日本人の考えを読んで、くやしさがこみ上げたからかもしれません。強制だったという証拠があるのか？韓国はでっち上げで話を大きくしてる。まあ、そんな感じでしたよ。犯罪意識が全くないんですねえ。それは耐えられませんでした。コプタニの顔を思い出せないとしても、今でもはっきりわかります。コプタニが遠くに嫁いでいくときの、怒りや、やるせなさや、絶望が。私は挺身隊のハルモニたちのように直接被害にあった人たちの恨みに、直接の被害は免れた人たちの恨みまで付け加えたかったんです。直接被害にあった人も、直接の被害を免れた人もみな同じ、帝国主義の暴力の犠牲者だったんです。免れはしたけれど、それでどうになりました？強盗の暴力を避けるためにというっかり十階から飛び降りて死んだら、強盗には罪がなく自殺ってことになりますか？朝鮮半島、三千里江山のいたるところで恋愛の喜びや、その香り立つような息遣いまで根こそぎに絶やし

ておいて、天も人も許さない犯罪を忘れてしまうのなら、私たちは人間でもありません。直接被害に遭った人の恨みに、免れた人の怒りまで加えたという私の気持ちもわかるでしょう。チャン・マンドゥギ氏の目に涙が滲んだ。

出処 朴婉緒短編全集 第6巻『あの女の家』（文学トンネ、2012）

初出 『13月の愛』（1997）

（KIRA KANAE・東京外国語大学大学院博士前期課程）